

2017.12.21 リレーシンポジウムその1 レビュー 「個性を育む都市デザイン - その研究・実践を展望する」



去る2017年12月21日に西村幸夫教授退職記念関連行事として、シンポジウム『個性を育む都市デザイン-その研究・実践を展望する』を東京大学本郷キャンパス工2号館で開催した。前半は都市デザイン研究室OB3名による研究と実践のプレゼンテーション、後半は近い領域を違う角度から眺める3名の論客を迎えて、3時間以上に渡る白熱した議論を展開した。その内容と様子をレビューする。

About the Relay Symposiums by Dr. Naoto NAKAJIMA

リレーシンポジウムについて

中島直人准教授（東京大学大学院工学系研究科）より

- ・西村幸夫教授の退職記念行事としての、リレーシンポジウム企画経緯を説明。
- ・西村先生から学を受けた私たちの都市デザインとは一体どのようなものか。登壇者はいずれも30代半ばから40代の先生方。研究者人生の半分以上を過ぎて、20年30年は残っているなかで何をすべきか。
- ・真野先生はライバルの佐藤研。川添先生は建築/土木のデザイン両方を経験されている。山口先生は地域の個性ということに関して一番深く研究・実践を重ねておられる。
- ・そういった方々との議論を通じて、我々の個性とか地域に対しての考え方を相対化していけたら。

Today's Theme by Dr. Taku NOHARA

テーマ解題

野原卓准教授（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院）より

< 都市デザインとは何か？ >

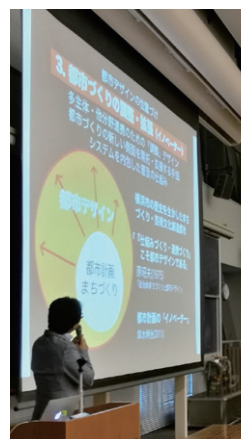
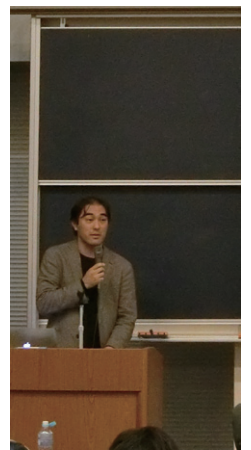
- ・自治体に「都市デザイン」に関してアンケートをした結果、非常に多様な回答があったことを紹介。すなわち都市デザインを一言で語るのには難しいとされる状況。
- ・歴史的に都市デザインは4つに整理できる。①建築と都市計画の鏡。建築デザインを集合体として統合する。②都市空間のフィジカルデザイン。③都市づくりの調整・拡張（イノベーター）。まちづくり分野の先行。④都市をデザインするための運動思想全体。
- ・歴史的環境維持は文化財の分野だったが、やがて都市デザインが扱うようになった80年代後半。70年代は縦割りの解消、80年代は分野を拡張しようとした時期か。最近では主体が拡張し、例えば横浜では都市デザイン室ができ、様々な人がその立場を担い始めている。
- ・無理矢理にでも都市デザインとは何かをまとめたほうがいいのかもしれない。だとすると、「人間性を大事にした空間を創る」「都市を構想する・実装する・経営する」などが根幹に関わるだろう。

< 個性を育むというキーワードについて >

- ・書籍『都市空間の構想力』での考え方の紹介。まちを読み込み、背景であったり意図であったりを読み解いていくと、それぞれに、らしさ・個性といったものが見えてくる。
- ・横浜の都市デザイン室は必ずしもトップダウンではなく、国吉直行氏（横浜市立大学）曰く、「地域の意思を後押しするためにある」。

< 研究と実践について >

- ・実学として考えれば、社会実装および地域にちゃんと落とし込むことが重要。
- ・都市デザイン研究室では「プロジェクト」を行い、実装と研究の狭間をずっと考えてきている。
- ・大学にいる我々がなぜ都市デザインなのか、という役割を果たすかというところでも議論したい。



プレゼンテーション

< 遠藤新教授（工学院大学建築学部）から >

- ・都市デザインの構想的側面、空間創造的側面、実践運動的側面の3つの視点を提示。
- ・これら3つの話は独立ではない。ひとつの都市デザインのプロジェクトを動かしていくときにこの3つが入り組みながら進んでいく。
- ・構想的側面……都市の文脈として個性を解釈し、可視化していくということ。
- ・空間創造的側面……価値の多様さを包含するような全体性を作ること。全体性を獲得する中で、ある種個性が生まれてくるのではないか。
- ・実践運動的側面……地域で関わった人と協働していくということが都市デザインでは必須。
- ・以下、プロジェクトの紹介。
- ・舞鶴／赤レンガ倉庫を活かした港の景観づくり。個々の資源を構造化していくという分析作業と、構想づくり。
- ・釜石／学生時代研究室で関わり、復興で再接触。急ぐだけで個性のない復興計画。個性を育むような復興をやっていくべきだと主張した。イオンをまわるとつながるようなものとする取組みの例。広場なら広場、建築なら建築、土木なら土木。きちんとその分野をやっている人とチームで動くことが重要で、都市デザインはそれらを束ねていくような役割。構想段階、基本計画、基本設計、実施設計、個々の設計の段階をつないでいくのも重要。
- ・ミネソタ州セントポール／まちづくり会社「Lowertown Redevelopment Corporation」の紹介。設計者ではなくて、設計者と設計者をつなぐ役割としての都市デザインの役割。
- ・岩手県西和賀町／温泉地で川沿いの環境に、自由に使える「クラブハウス」。細かいPJが動き出すようになるとそれを契機に魂のこもった構想が描けるようになる。それが連鎖的に事業を進めていく道しるべになることを実感。
- ・草薙／景観に関する依頼。景観だけでなくまちづくりにつなげていく。多くの関係者をデザイン調整しながら現場を進める。
- ・大野村／西村研時代。社会実験からまちに広がっていくという、原点の活動。
- ・中目黒／蛇崩川緑道を裏から表にするプロジェクト。中目黒と三茶を結ぶ新しい都市軸みたいなものができる。
- ・新百合ヶ丘／空地一個から取り組んで、やわらかく横展開する。同じような、できそうなことを展開していく。
- ・我々は外に生きる人でありながら個性を育む都市デザインを推進していこうとする立場。構想を価値観として地域と共有していくことが非常に大事。
- ・立ち位置によって出来ることは変わってくる。影響力を持たせられるような関係をつくらないといけない。これが都市デザインにおいて重要な方法論だと感じる。

< クリスマン・ディマー助教（早稲田大学国際教養学部）から >

- ・都市デザインの重要なところとして、専門家ではない人に都市の重要性を伝えていかなければ、本当にこれからの世界の都市の諸問題は解決ができない。Interdisciplinaryな考え方が必要。本当にいろんな専門家が集まらないと、チームにならないと環境的な問題が解けるかどうか難しい。
- ・ローマクラブの『成長の限界』のこと。私たちの実践の中では常にそのことを考えている。しかし、野原先生の調査では、環境とか環境的なデザインとかは都市デザインのテーマとしてあまり出てこなかった。実は都市デザイン研の論文も環境的な論文は書かれていない。
- ・環境問題や社会問題は常に進みつづける。その中で、地域の研究や実践はどんな責任を持つのか？どんな可能性があるのか？私は悩んでいる。
- ・ドイツの限界集落のこと。日本にも同じ問題があった。なんでドイツの実践者と日本の実践者が一緒にこの問題を解決しないのか考えるようになった。
- ・ISSUEをシェアせよ。共通の課題があって、共通点を探して。そこから始まらないとあんまりいい動きにならない。インターローカライゼーションという言葉が好き。現場と現場をつなぐ。
- ・3.11以後。東京にいて何ができるか考えて、大きい地図を作った方がいいだろうと考えた。都市計画の人は都市計画の事例だけ。建築の人は建築の事例だけ。誰が何をどこでやっているのか誰も知らなかった。
- ・東京トランジションズの取り組み紹介。東北のものを東京へ応用した。「一週間、現場でやる」。
- ・ドイツの中にも日本の中にも新しいエネルギーを上手く使って地域創生をやっている人がある。平野彰秀さん(NPO法人地域再生機構)とか。
- ・都市デザイナーとしての仕事として、一番重要なのは翻訳すること。一般市民への翻訳、領域分野間の翻訳、文化の翻訳。
- ・地域での小さなイノベーションを社会課題に接続する方法論の必要性。これは、世界中が研究しているホットトピック。その中で都市デザインの可能性はどこにあるのだろうか？

< 中島伸講師（東京都市大学都市生活学部）から >

- ・三国という湊町、三国プロジェクトの紹介。
- ・非伝建地区での町並み保全。公的にはオーソライズされていないという状況で都市保全のステップアップがどうやったら図れるのか。
- ・歴史的な市街地の風景の保全というこれまでもやってきているテーマにおいて、どこに次の課題があるのか。
- ・空き家問題をきっかけにした歴史的市街地の風景の保全。空き家の問題解決は目的なのか手段なのか？目的と手段を円環的にグルグル回すことを基本戦略とし、その上でのステップアップを考えた。
- ・西村先生のアプローチ、北沢先生のアプローチ。それをつなげていくようなことを考えてみたいというのが野心。
- ・北沢先生が主導されていたシナリオ型プランニングの可能性。課題・目的・手段を組み合わせることでシナリオを起こしていき、随時書き換えながら進める都市デザイン。
- ・遠藤先生の話であった、1施設をどう考えるかというときに、構想としてどう発展して受け止めて行くかというのはある種シナリオプランニング的なのではないか。
- ・都市の変動速度が読めない時代に突入しているのではないか。だからこそ速度の側から都市計画やプランニングを考えてみるというのがシナリオプランニングの可能性だ。
- ・空き家問題とは都市デザインが不確実性、突発性はどう対処するかということの代表例。
- ・こうあるべきだということを議論するためには、その場その場でまちづくりの事業が起きていくのを即興的に捕まえて共有して広める、というのが像としてありえる。
- ・研究としては、地域に眠る伝統的不動産流通構造の継承について調査している。もともとあるコミュニティの社会様式・生活様式の中に何か型があってそのタイポロジーをちゃんと見つけて行くところから、もう一回町の再生の戦略を考えられるのではないか。
- ・アクションとしてフィードバックを考えているのが、アーバンデザインセンターの設置。大学ではない関係者が向こう側にちゃんといる中で、協働することが重要。

パネルディスカッション（前半）



8名の登壇者（左から）

野原卓（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授）、中島伸（東京都市大学都市生活学部 講師）、Christian DIMMER（早稲田大学国際教養学部 助教）、遠藤新（工学院大学建築学部 教授）、真野洋介（東京工業大学大学院社会理工学研究科 准教授）、川添善行（東京大学生産技術研究所 准教授）、山口敬太（京都大学大学院工学研究科 准教授）、中島直人（東京大学大学院工学系研究科 准教授）

< 都市デザイン自体、かつてと今で何が違うのか？ >

・都市デザインというものが、北沢先生の80年代頃から、変わってきているところがあるだろうか。何かしら実践から導き出せるものはあるか。

【真野】

・縮小時代、空き地をどうやってデザインするかが問題意識として出てきた。空き地を考えるには行政機構も変えなくてはならない。そこから都市デザインの新しい手法を作ることになる。【遠藤】

・今の都市デザインは、速度の問題がすごく大事。ファストかスローかをどうやって見るか。どうすれば即応できるか、ゆっくりとだけれどもいつか動くその時のために備えるということ、デザインの戦略としてどうセットするのが焦点。これは高度成長期で対応できていた問題とは質が変わってきている。【伸】

・建てない時代。昔はアイデアがあって、建てて、造った。今は参加しないといけない。3.11でもよくわかったのが Social Capital や Community Science の重要性。【クリス】

< それぞれが思う、構想とは？ >

・世代によって“構想”という言葉の頻度が随分違った。遠藤先生は50回、中島伸先生は1回。意識的なものなのか。例えば、遠藤先生の“構想”を“計画”に置き換えたらどうなのか。【川添】

・“計画”というワードは、どうやって実現するのかってところまで見えている。“構想”は目指すべき将来像がこうあるべきだ、というもの。XS スケールの行動を積み重ねているとき、決まったものにまで持っていく必要性を感じることは少ない。だから“計画”という言葉にまで落とし込まない。【遠藤】

・構想というものは本当にあるべきだろうか。ビジョンは勿論重要。地域に入ると僕が構想は作るわけじゃなくて、地域の人が持つビジョンや構想の手助けをしているにすぎない。【クリス】

・当然構想ということは考えているし受け継いでいる。見えていなかったものに共感し、概念化・価値化するかというときに“構想”という言葉を使う。今日の発表は、どう社会実装するかをテーマに話したので“構想”が少なかっただけだと思う。【伸】

・構想というものには、都市デザインと、ISSUE のシェアのふたつがある。後者はどちらかと言うと現代の都市デザインかもしれない。例えばパークレットをやることで、人間のための街路という共通認識を持つ。そこはいわゆる構想と直結していないが、結果として多面的な都市が出来上がる。【遠藤】

・同感。三国のシナリオプランニングも、いわゆるクラシカルに完成図を描いてそこに近づけるためにやっていくとやり方全く違うものが提示されているのを感じた。方法論として何か前進があったのでは。【川添】

・両方やる必要がある。まだ三国は形になっていないけれども、アクションプランもやるし、構想も通していくという両方やることが重要。【伸】

・震災に引き寄せて言えば、問題の共有をしている間にも日々の生活は進む。そのなかでは断片的に描いていくしかない。断片的であっても、パラレルにいろんなものが動かせるというのが、私としては都市デザインだと思う。【真野】

・西山卯三の「構想計画」。構想という共有ツールを使ってどういう次のビジョンが立てられるのか、そのための材料だ、という流れがあり、そんな流れも反映されているのかもしれない。【野原】

< 都市空間の個性／アイデンティティの価値観 >

・まちづくりの芯を議論する、そういうカルチャーが重要になってきている。個性を育む都市デザイン、これは私の中ではまちづくりの芯である。都市の課題の中でもアイデンティティに関することは、根本的なもの。【山口】

・個性と言ったときに、空間を、人を含めた存在として捉えていくことが現時点での私なりの解答。人が関わらない空間と言うの街に豊かさをもたらさない。皆が関わりえるシナリオにより、空間に人が入ってきてまちが豊かになる。そのなかに都市の個性がある。【山口】

・人が関わる空間になることで、良い空間になると信じてながら取り組んできた。でも、人もお金も時間も有限だから広がりきらないジレンマもある。【遠藤】

・昔は、鎮守の森が都市の精神的な中心。これから信仰が薄れていく中で何が精神的中心となり得るか。地域のアイデンティティ、風土のよさなものがその精神的な拠り所にならないか。【山口】

・三国とかは、一度壊すと再建築できないけれど、ある種それが非常に個性である。一周回ること新しい場所になり得る。そこが面白い。【真野】

パネルディスカッション(後半)



< 部分の個性と全体の個性、関係性のなかの個性 >

- ・日本に個性を容認する土壌があるのか。小学校だって先生のいう事を聞く生徒がいい子、と言う。個性を出してピンク色の家建てたら、ダメと言うのではないか。個性とは、リミッター付きの個性なのか、それともリミッターなしの個性なのか。【川添】
- ・都市に個性と言ったときには、共有されたものの上に見出される個性があるのではないか。【遠藤】
- ・物理的な物事ではなくて、関わる人同士の間形成されるもの。せめぎ合う。せめぎ合いの結果、ある種の連合体みたいなものが生まれることもある。どこまでコントロールすることがデザインなのかということも、問題提起できるのではないか。【真野】
- ・グローバル化した中では小さな個性が大事。一緒に探しながら見つけ出していく個性を大切にしたい。【クリス】
- ・個人がピンクにしたいというのは自由であってよいが、ここでは個人としての個性ではなく都市という主語を問題にしているというのが私の理解。自分の都市への関わり方、それをみんなに共有してもらう仕方が肝心。【伸】
- ・色のコントロールについて。景観の論理で言うと多様性は認める、ただどうしても調和がそれより優先される。基質を重視するのが古典的な都市デザイン。そのあたりが景観行政の限界かもしれない。【遠藤】
- ・大谷幸夫先生の言葉のとおり、都市デザインとは他者への想像力である。他者への想像力には二つあって、ひとつは他人のいろんな考えに対し個性を認めるということ。ふたつめは、ピンクになるならば他に悲しむ人が絶対に出てくる、そういう人のことを想像すること。両方を想像する過程で個の思いなどを拾い上げてゆくことが都市デザインにおいて大事。【中島直】
- ・オリジナルはオリジンにつながる。個性というものがどこからきているのか。そこを考えることも重要。【野原】

< 都市デザイナーの責任とは >

- ・責任という言葉が何度か出てきた。我々はどこまで、人びとの生活に介入しているけれども、その結果に対する責任ということまでは、実はあまり考えがおよんでいないのではないか。【中島直】

< 研究と実践／都市論の構築について >

- ・研究と言っても、すぐに役立つ、すぐに応用できるというものだけではない。ジェイコブズもリンチもアレグザンダーも、実践と論とを伴っていた。一人ひとりの人生は短いけれども、都市論という形で何か次世代に残せるものはあるかもしれない、そういった姿勢で研究室としてはのぞんでいきたい。【中島直】
- ・デザインばかりが課題解決法ではない。例えばカルチュラル・ランドスケープとかは研究になると思うし、さらに研究によって地域を読み解くことそのものが、アイデンティティの再構築にもつながりうるはずだ。【山口】

< 都市というものの定義そのものから >

- ・『サビエンス全史』を読んで。定住を求めた人間が高密度で暮らし、都市問題を引き起こして、都市工学科は誕生した。が、これからの時代、人々の集まり方は旧来の都市の形をとる必要はない。西和田とか三国とかは都市ではないと思いつつ、実は新しい人間の集住の形かもしれない。これを何と呼ぶか。都市と呼び続けるのか。そんなところも考え続けていきたい。【川添】



Summary from Prof. Aya KUBOTA

まとめ

窪田亜矢特任教授（東京大学大学院工学系研究科）より

- ・個性を育むことが目的となる都市デザインではなく、自ずと地形と歴史を読み解いて、その結果出て来たものが個性的なのではないか。なぜ西村先生は「個性を育む都市デザイン」と仰るのか。その理由を遡る。
- ・『世界文化遺産の思想』の引用。多様な文化の並立を認め合い、お互いの文化を尊重し合うユネスコの基本理念。個々の個性、文化ナショナリズムを超える、“世界文化遺産”という多様な個性の総体としての価値。
- ・これからの都市デザインをどういうふうに考えていけばいいのか。世界文化遺産という人類が考え出した仕組み。それを通して我々はアナログカルに考えることができる。
- ・この場にいる都市デザインのプロフェッショナルの皆さんは、個々の町にも関わらなくてはならないが、それを多様として理解し、総体としての価値を都市デザインとして生み出していく。これを職能として確立していけるか、社会に提示しているか。ここにいる我々全てへの問いとしてあると思う。



Comments from Prof. Yukio NISHIMURA

西村幸夫先生ご挨拶



- ・都市デザインとは何かということ、今までちゃんと議論したことはなかったなと思った。自分たちの研究室で自分たちの研究室のレゾン・デートルは何かと本当に真面目に考えたら、ちょっと分裂しかねないからかな。
- ・都市デザイン研究室という名前は、私が助教授になった時につけた。これからは「都市設計研究室」ではないと感じたからだ。現場に学び、現場から出てくるものが答えなのではと思っていた。それは都市デザインという言葉なのではないかと思った。それは直感だったが、そうした流れの中に今日の議論があったとすれば、自分は間違ってたのかなと思う。
- ・現場にこそ真実がある。なぜならそこに生活者がいるから。人というのが、生活者がいて、彼らがどんな思いでその町に暮らしていて、どうしたいのか？何で困っていて、何が元気の元になっているのか？そういうことをベースに、ものごとを考える。その方法論には普遍的なものがあるのではないかと考えている。
- ・書籍の『都市空間の構想力』という名前は、都市空間が自ずと構想力を持っているということを言いたい。住んでいる人がその町をつくってきた、その先をやるのが都市デザインの役割ではないかと思っている。それは今でも変わっていない。
- ・中島直人さんが責任と言っていたが、私にとってその意味は自然で、それは未来の都市に対する責任、あるいは未来の都市に住む生活者への責任。都市の空間の構想に一つ付け加えられれば、次にそれを読み解いてくれる人があるわけだから、自然とそう思える。
- ・我々自身も一人の生活者として自分の町をどうできるか。そういうものが他の町にも生活があり、喜びも悲しみもある。そういうことをわかっているプランナーになってくれればそれこそが未来を作っていくのではないか。

以上

